



Title	ジャック・ロンドン作 「フークラ・ヒーンのみまい」
Author(s)	大矢, 健
Citation	明治大学教養論集, 522: (13)-(31)
URL	http://hdl.handle.net/10291/18691
Rights	
Issue Date	2017-01-31
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

ジャック・ロンドン作「フークラ・ヒーンのもめまい」

大矢 健 訳

フークラ・ヒーンは背が高くじめじめした草の中ではなれば屈み、なれば跪ひざまずいていた。彼には動きというものが一つとしてない。だが、もう一時間も、ずっとその恰好をしている。手には、戻り付き骨矢が仕掛けてある細い弓を持っていた。石にでもなったのかのように不動だったが、しかし、表情は鷹のような緊張感に満ちていた。実際のところ、このときほど彼が鋭敏で生命力に溢れていたこともなかった。彼の鼻は、生い茂る植物について完全な報告を伝えていた。低い堤の端で、柳が芽をつけアスペンも葉を揺らしている。彼の背後では赤いラズベリーが他の低木に負けじと茂っていた。隠れて見えはしないが十歩かそこいら行った右手には、鮮やかな色を放つ有毒のスネイク・フラワーの藪がある。これらのことが、彼には分かっていた。

いくつもの感覚器官が、フークラ・ヒーンに多くのことを知らせていた。下草の湿り気が伝わってムース革のズボンを濡らし、膝が冷えてくるのが感じられる。頬に当たるそよ風から、青白い月が消えたあと、風がゆっくりと逆向きに変わっていたのも分かっていた。地面から立ち上がってくる低音のわずかなうなりを、彼の耳はその部分へと分解して区別した。下草や葉のそよぐ音、鳥やリス、あるいは水鳥の鳴き声、さまざまな種類の昆虫たちが放つ音。

だが、彼の表情に期待の気配をあたえた、もっとも大事な音は一つだけだった。目の前には枝や木切れが乱暴な規則性をもって絡まり、ダム状になっている。沼地の水を堰きとめ、浅い池ができている。ダムが壊れてしまった箇所からは、水が流れ出て大きな音を立てていた。けれど、これが彼の注意を引きつけた音ではない。上流のほうから、わずかな短い何かが地面に着地する音が聞こえてきた。続いて、それはぶっくりした全身を水面下にもぐらせる。ふたたび辺りは沈黙に包まれる。水面が揺れたところを彼はじっと見つめていた。

じっと待ち構えている彼を、新たに聞こえてきた音が脅かした。ずっと向こうから犬の低い鳴き声が聞こえてきたのだ。一度などは小枝がパキッと折れる音までした。腹が立ったのだが、その感情が顔に浮かぶことはない。彼は聴覚に全神経を集中する。上流からは、何かが羽根を羽ばたかせる低い音が聞こえてくる。それが近づいている。下流からは、枝がもう一本折れる音が聞こえてくる。これも近づいてくる。

この二つの音が、まるで競い合うかのように近づいてくる。池からくる音が勝ってくれることを彼は祈っていた。確かにそちらが先だった。水面のさざ波が割れ、小ぶりの丸太が顔を出したかと思うと、ダムのようなところへ向かって動いていく。彼が邪魔なものをかきわけ前へと進むと、大きなネズミのようなものの頭部が見えた。小さな丸い耳は後ろに引かれ毛皮にもぐり、ほとんど見えなくなっている。

フークラ・ヒーンは音を立てないようにしながら弓を引き、待った。その小動物は丸太を押しつけ、ダムの隙間を埋めようとしていた。これがうまく行かないとなると、そいつはダムの上に登った。体の三フィートぶんぐらいが露わになる。栗のような茶色の分厚い毛皮に身をつつんでいる。下流のほうからまた小枝の折れる音がしてくると、その動物は警戒し、聞き耳を立てようとするかのように、後ろ足で二本立ちになった。フークラ・ヒーンが達成感のスリルを感じたのは、このときだった。何事かをやったのけた、それもうまくやったのけたのだと実感された。矢が音を立てて月

夜を裂く。その音に自らの死を知った動物は串刺しになった。

少年は——フークラ・ヒーンはまだ十二歳だった——、飛び上がり、喜びの雄叫びをあげた。下流からも同じような声が返ってくる。足元の藪を踏み散らすとバキバキという音が鳴った。これが返答だ。そして、彼は身をかがめ、広く平らな尻尾でビーバーを持ち上げる。向こうからやって来た少年も藪から飛び出してきて、下草を踏み分けこちらへ近づいてきた。

「あの古株のグレイ・ノーズをついに仕留めたんだな」と、興奮して少年は尋ねる。

「そのとおりさ」というのが、フークラ・ヒーンの答えだった。無表情をよそおい嬉しい気持ちを隠して、落ち着いて答えていた。「そのとおり、あの古株のグレイ・ノーズだ。クラニック、お前に少し感謝したほうがいいんだろな。なにしろ目が見えなくなったオオジカが立てるみたいな爆音を立てて、やって来てくれたんだからな」

「音を立てないように気をつけて、来たつもりだったんだけど……」とクラニックは、嫌味に少し傷ついて答えた。

「そうだよな、キャンキャンいう犬も一緒だったしな」

「ブローケン・トゥースはついて来ちゃうんだよ。下がってろって言ったのに」と、クラニック。急に勢いづいて彼は続ける。「俺らの部族が下流に向かい、ユーコン河のところにいる白人たちを見に行くっていう話、聞いてるかい？」これを聞くと、フークラ・ヒーンは喜んでジャンプをして踊りだした。クラニックも彼の手を取り、二人はぐるぐる回り始めた。それほどまでに嬉しかったのだ。そしてやがて、ダンスはレスリングになり、二人は息を切らしてゼーゼーいうこととなった。クラニックがビーバーの尻尾の上で足を滑らせると、フークラ・ヒーンはこのチャンスを見逃さず、相手を後ろ側に倒し、肩をじりじめの地面に押しつけた。やがて二人は立ち上がり、笑い声をあげた。ビーバーを担ぎながら、二人はキャンプへの道を進んでいった。

キャンプへと帰る途中、クラニックは寄り合いで何が話されたかをフークラ・ヒーンに教えた。もっとも勇敢な狩人の一人クーツウナルーが、昨年の秋、道から外れてしまっていた。長いあいだ消息不明だったあと村に戻った彼は、白人たちについての信じられないような話をした。部族の誰もが行ったことのないホワイト・リバー（訳註）の奥まで彼は進んでいたのだ。偉大なるユーコン河に辿りつきドーソンという不思議な町にまで到達していた。クーツウナルーは、寄り合いの場で、自分たちが持っている毛皮のことにふれ、それが白人たちにどれだけ高く売れるのかを語った。部族がドーソンへと向かい、「そこで毛皮を拳銃、毛布、深紅の着物と交換して」大いに儲けてやろうと、彼の計画を話したのだ。

だが、葉づくりのヤクーがこの意見に反対した。部族の皆知るように、彼もまた白人たちとかつて接触をもったことがあったのだ。白人たちはとても悪い奴らなのだと言った。クーツウナルーはそれを嘘だと言った。白人連中はいい奴らさ、そうじゃなかったら、俺が新品のすごい銃をもって帰ってくるなんてあり得なかったらう、と。

こうして議論は進みつ戻りつをくり返した。白人に会ったことのない多くの者たちは、クーツウナルーに賛成した。彼のような立派な銃が欲しいと誰もが思っていた。フークラ・ヒーンの父親であり部族の酋長だったコーワイも、クーツウナルーの計画に賛成の立場をとった。そこで、ヤクーは葉づくりの要職を担っている男ではあったが、賛成せざるをえなくなった。そうして、このような決定となったのである。現在季節は夏で川も勢いよく流れているから、二日のうち、部族全員、男も女も子どもたちも、カヌーに荷物を載せ、その不思議の町へと出発すると。

クラニックがこの寄り合いでの話し終えたあと、しばらく二人の少年は黙って歩いていた。クラニックがふたたび口を開いた。重い調子だ。「これらの白人がほんとうに全部白いわけではないだろう。顔や手も、全部が白いわけじゃないだろう」

「いや、白いんだよ」と、フークラ・ヒーンが何気なく言った。「奴らの目は雲がないときの空の色をしてるんだ」

クラニックが不思議そうにフークラ・ヒーンを見つめた。クラニックは、フークラ自身が気づいていない彼の不思議な点をいくつも知っていたからだ。コーワイとヤクーが、話してはいけないと言っていた不思議な点だ。

が、フークラ・ヒーンは続ける。「白人の女たちは白くて柔らかいんだ。髪は黄色でね、ほんとうに黄色をしているんだ。ときどき思い出すんだけど……」

ここで彼は突然に歩を止め、興味津々になっている友人の眼を覗き込んだ。

「何を思い出すんだ？」とクラニックが穏やかに訊く。「お前は白人の男も女も見たことがないだろう？」

「思い出すんだよ……」

「お前はほんと夢見るフークラ・ヒーンだなあ」

「そのとおりだな。俺は夢を見てしまうんだ」と、首を横に振りながら寂しそうにフークラ・ヒーンは言った。「たしかに俺は夢を見る」

まるで幻でも追い払うかのように、彼は目の前で手を払った。その後、キャンプに着くまで、二人は無言だった。ところが、夜フークラ・ヒーンは、毛皮に潜り込み熊の皮をかぶっても目を閉じることはできなかった。眠りはまったく訪れてきそうにない。昔からの病ヤマイだった。コム・タ・ニッチ・イ・ワンだ。またあれがやって来たのだ。もう卒業したと思っていた夢見の病だった。彼が子どもだったころ、周りの少年たちがおっかながって彼から逃げ出した病だ。女たちは、そんな状態の彼を見て涙ぐんだ。夢見の病。これのせいであの頃、どれだけ惨めだったことか。

もちろん誰もが夢を見る。狼ウルフ犬ドッグでさえ夢を見る。けれど彼らが夢を見ると、目は閉ざされ眠っていた。フークラ・ヒーンの場合、目は開かれ覚醒したままだった。また夢の内容は、彼らの場合、彼らが知っている事柄についてだ。狩とか漁とか。ところがフークラ・ヒーンは、自分が知らない事柄を、誰も知らない事柄を、夢に見たのだ。どう言い

表したらいいのか分らないような物事、とり憑いた記憶。過去のことを思い出させさえすれば、すべてが明らかになるような気がした。でも、どれだけ頑張っても、過去を思い出すことはできなかった。

そんなときは、川熱におかされたみたいな感じがした。頭がくらくらして、目頭が震え涙が出た。指が二倍に膨れ上がったみたいだった。不思議と大きくなって、ぼんやりとした感覚の指。ぼんやり。まさしくそれがあの感じだ。過去を思い出そうとすると、頭がぼんやりしてめまいがするんだ。

大人になるにつれ、彼はだんだん夢見をしなくなるようになり、そのことを忘れていったのだった。葉づくりのヤクは皆の前でまじないをやってくれた。悪霊がフークラ・ヒーンの中から出てゆくようにと。そして、昔のことを思い出そうとするのは止めたほうが良い、さもないと不幸に見舞われる、とこっそり教えてくれた。フークラは教えに従ったから、悪霊は姿を消した。ところが、今日ここにきて、また《それ》が帰って来てしまった。俺ほど可哀想な子どもがいるだろうか、と彼は考えていた。手を力強く握りしめ、何時間も眼前の真っ黒な虚空を彼は見つめた。

酋長であるコーワイのカヌーが部族の先頭に立っていた。コーワイと同じ舟に乗っていたのがフークラ・ヒーンとクラニックだった。川の曲がりくねったところを何度もやり過ごしながら、この日一日中、岸に舟をつけることなく彼らはユーコン河を下っていた。朝早くにある場所を通過したときには、興奮した白人たちが発砲してきた。クーツウナルがコーワイの横でカヌーを漕いでいた。あれが白人たちの習慣なんだろう、あいつらのところにいた時に同じ経験をしたことはないが、とクーツウナルは言った。一行はしばらく考え込んだが、それが単なる白人の習慣であるとも確信できず、近寄らないことにした。ドーソンへの旅は続行となった。

この日一日中フークラ・ヒーンは夢見の病に苦しんでいた。遠方から発砲してくる白人を見てると、とりわけ強い発作に襲われた。あのぼんやりとした感覚、あのめまいは圧倒的だった。同時に、何かが起こりかけているという感覚

にも苛まれた。それが何なのかは分からなかったのだけれど。

フークラ・ヒーンは、これをクラニックに伝えようとした。だがクラニックはこう言い返してきた。「ガキじゃあるまいしよ。お前を食ったりするような奴がいるわけないだろ」。自分が怯えているわけではないと確信していたけれど、このあとフークラ・ヒーンは黙っていることにした。怯えていなかったから、何であれ起こるべきことは起こってしまった。えばいいと願っていた。

お昼ごろ、船隊はいくつもの大きな岩礁を越えたあとと急に向きを変えた。増水して膨れあがったクロンダイク川がユーコン河と合流する地点だ。ここで何の前ぶれもなく、ドーソンの町が目に飛び込んできた。驚きの光景だった。

川岸から山の裾野まで、彼らの目の届くかぎりの場所がテントとキャビンで埋め尽くされていた。このあふれるほどの住居の山は岸辺から水面にも、川の中にまでも迫っている。川岸は一マイル半にわたって舟で埋め尽くされていた。

三ないし四フィートの深さのボート、平底船、ドリー船（舟）、カヌー、巨大な筏。どれも男たちの食料や装備品で満載である。その突然の出現と巨大さゆえ、酋長のコーハイは息を飲み、ただ言葉を失って茫然と眺めるしかなかった。

フークラ・ヒーンはめまいを覚え、ほとんど窒息しそうだった。急いで手を伸ばし、両手で頭を抱えた。これが理解さえできれば！ これら全部は何を意味するんだ？

クラニックが、パドルが漕げないぞと叱りつけてきた。フークラ・ヒーンは意志の力で何とか自制心を取り戻した。彼らは岸辺に寄り、カナダ北西部騎馬警備隊本部の近くまでやって来た。そこではイギリス国旗が舞っていた。

フークラ・ヒーンはそれを指さし、「あれは旗だ」と言った。

「どうしてそれが分かるんだ、夢見屋さん？」とクラニックが訊く。

しかしこれはフークラ・ヒーンの耳には届いていなかった。一行は、大型のヘラジカと同じくらい大きな動物を何頭

も載せた巨大な船の横を過ぎていった。こんな光景に女たちは恐怖を感じ、何艘かのカヌーは近寄るまいと川の中のはうへと引き返した。

「それじゃあ、あの獣は何者なんだ？」と、いたずらっぽくクラニックが尋ねる。「あれはなね……」とフークラ・ヒーンは口ごもる。それから胸を張ってこう答えた。「あれは、馬というんだ」

「そのとおりだ」と、カヌーが横にならんだ場所に来ていたクーツウナルーが同意した。「あれは馬というものだ。俺も前に見たことがある。害をなさない獣だ。でも、なんでお主がそれを知っておる？ フークラ・ヒーン？」

フークラ・ヒーンは首を横に振り、パドル漕ぎに戻った。カヌーは旋回して船着き場に向かっていた。船が棧橋にしっかりと結び留められると、彼らは急峻な川岸を登り、家と家のあいだの空き地に向かった。旗がそこらじゅうで舞っていたが、警備隊本部の上にあったものとは違う種類のものだった。男たちも、そこらじゅうにいた。ライフル銃やリボルバーを撃ちまくり、狂ったように叫び声をあげている。

群衆が空き地に集まる。目を見開いたインディアンたちも空き地の周辺部に整列した。すると喧嘩は収まる気配となった。空き地の中央、木材の山の上に男が一人立ち、話を始めた。彼は彼の頭上に舞う旗を何度も何度も指さしていた。話しているあいだ、何度も拍手が起こり、賛意を表す怒号が響きわたり、銃声が鳴った。そんなときには彼は話を止め、横の箱の上にあったグラスから水を飲んだ。

「ああ、ああ」とフークラ・ヒーンが大声をあげる。心に浮かんた幻影を捕まえようと必死なのだ。

「インディアンにしてはちょっと変な子どもがいるな」と、汚れた厚ラシャ製の上着を着た男が言った。彼はときどき帳面を取りだしてはメモをとっている。

フークラ・ヒーンはすぐ、この男をちらりと見た。が、何を言っているのかは分からない。彼を見ていると、例の夢

見の病が暴力的に襲ってきた。

メモをとっていた男の相棒、騎馬警備隊少尉の制服を着た男は、口から葉巻を抜き取って大声をあげる。「おいおい、あいつはインディアンじゃない……」

ところが、このとき赤毛をした少年が、火口ほくちを紐につけた。紐は何百本もの細い赤い導火線につながっている。少年は導火線を地面に投げ出す。すぐさま輝きと火花と轟音しゅうおんが出来た。ヤクーを先頭とするインディアンたちは、恐怖に駆られ後ずさりした。

いた場所に留まれたのは、フークラ・ヒーンだけだった。まるで霧が大地から上昇し、陽の光のもと全てのものが澄みきって明るく輝きだしたかのように、唐突に、彼は軽くなったような感覚に包まれた。めまいはなくなっている。「火花だ！」と彼は叫んでいた。爆発するカオスの中に踊りながら飛び込んでいた。「火花だ！ 建国記念日！ 八月四日！ ばんざーい！」

最後のクラッカーが鳴り終わると、フークラ・ヒーンは我に返った。驚嘆し褐色の皮膚のもと赤面してはいたが、彼はおずおずとまわりを見回す。部族の者たちは元の場所に戻ってきていて、興味深げに彼をじろじろ見ていた。しかし酋長のコーハイは、寂しそうな表情を浮かべて、まっ直ぐ前を見ていた。少尉とメモをとっていた男が、目の前まで来ていた。

「お前の名前はなんという？」と、少尉が訊いてきた。腕を掴まれた。

「ジミー」と彼は答える。まるで、それがこの世でいちばん自然な返答であるかのように。ここでふたたび例のめまいが襲ってきた。なんでそんな変ちくりんな答え方ができたのだろう？ と考え始めていた。男が言った言葉は分からない。ジミーというのは何を意味するんだ？ なぜそんな名前が出てきたんだ？

「どここのジミーだ？」と、少尉が訊いていた。

フークラ・ヒーンは首を横に振った。白人の言うことは分からない。それに、部族のみなが興奮して集まってきている。ヤクーが袖を引っ張り、男から離れるようにと言っている。

「年齢はいくつになる？」

ふたたび彼は首を横に振る。しかし、まるで何かの役に立つだろうかというように、こう付け加えた。「ホワイト・リバー」

「うん、そのとおり、ホワイト・リバーだ」。通訳の役割を果たす機会を得たクーツウナルーが、嬉しそうに口をはさんだ。「ずっと南のホワイト・リバー」

「ホワイト・リバーか」と、びっくりした少尉が繰り返す。メモをとっていた男のほうを向き尋ねる。「ドーズ、この子はいくつぐらいだと思う？」

ドーズは考え込み、「十二歳、十三歳というところかな」

少尉は考えを声に出していた。「一八九一年の夏、九二年の冬、四年と八カ月を足すと、十二歳になるじゃないか……」。一度言葉を失い、そしてこう大声で叫んでいた。「ドーズ、ドーズ、間違いないこの子だよ。捕まえるんだ。俺が大事なら、どうかその子をしっかりと捕まえておいてくれ」

フークラ・ヒーンには何をされているのか分からなかったけれど、気がついてみると、リス皮製のシャツの前が少尉によって開けられていた。少尉の腕がシャツを引き裂いていた。ヤクーはあいだに入り込もうとしたが、少尉が彼を乱暴に後ろに押しやった。部族の者たちからは、ざわめきとうなり声が発せられた。鞘からナイフが抜かれ煌めいた。錆びついた銃からもカチっという音が聞こえた。が、コーハイの厳格な命令で、皆は静まった。

「見てみる、白い肌だ」と、少尉がフークラ・ヒーンのはだけた胸を指差して言う。

ドーズは仔細に検討し首を横に振る。「かなり黒っぽいと言わざるをえないと思うが」

「それは日焼けさ」と、いらいらした少尉は大声になる。こう言いながら、さらにシャツを引き裂いた。「腋の下を見
てみる。日焼けしない腋の下を」

「たしかに白い」と、すぐに確信したドーズが叫ぶ。「どうしたらいい?」

「どうするって? 教えてやるよ」。少尉は、大いなる好奇心に駆られて見つめていた例の赤毛の少年を呼び寄せた。

「走れ! 大急ぎでジム・マクダーモットを連れてくるんだ。奴はあの人だかりの中にいるから。あいつをあそこで見てから、五分と経ってないから」

赤毛の少年は走りだした。フークラ・ヒーンは、こんな成り行きに途方に暮れながらも、少年が走ってゆくのを見ていた。それでも、起こるべきことが起こりつつあるとは感じていた。

クーツウナルーは何やら熱くなって少尉に説明していた。少尉はその一言一言に頷きながら、ときどき短く射た質問していた。

「なあ、なんだよ、少尉。何がどうなっているのさ」と、メモ帳を取り出し鉛筆を構えた恰好のドーズが口をはさ
だ。

「マクダーモット、ジム・マクダーモットさ」と、少尉が口早に答えた。「この地の古株金探しさ。少なくとも数百万ドルは当てた黄金王ボナンザ・キング。かつてはP・C・Cカンパニー(現在)の支社営業支配人だった男だ。奴は、九四年に息子と一行パーティを連れて、アラスカの西海岸からこの地に来た。奥さんは次の年に、普通のルートで来ることになっていた。誰も知らない土地に初めて訪れる白人一行だったのさ。最後に訪れた一行にもなったのだが。恐ろしい寒さ、餓死寸前

の状態。じじつ二人が飢死した。その二人というのが一行のなかでいちばん体力がない奴らだったらしいが、マクダーモットと他の連中が獲物を求めて出ているあいだ、奴らがマクダーモットの息子の面倒をみるようになっていた。一度、彼がその話をするのを聞いたことがあるんだ。ところが、オオジカを仕留めて三日後にキャンプに戻ってみたら、留守番の二人がコチコチになっていて、息子がいなくなっていたんだ」

「息子が消息不明になったと？」と、ドーズの鉛筆は宙で静止した恰好だ。

「うん、消息不明だ。その後なんの手がかりもなし。キャンプは川の近くだった。それでマクダーモットは、息子が川のほうへハイハイして行って、川に落ちたと考えた。でも、今考えてみると、カヌーでやって来たインディアンがいたんだろう。そして、彼らは二人の死んだ男を見つけ、まだ命のあった子どもを連れ去った。もちろん、マクダーモットは、そんなことになっていたとは夢にも思わなかっただろうけどな。でも、ほら、ご当人のお出ましだよ」

フークラ・ヒーンは、少尉の視線の先を見た。すると、背が高く濃い頬ひげをたくわえた男が視界に入ってきた。驚いたことに、まったく驚いたことに、それは夢の中に現れていた幻が生身の肉体を持った姿だった。ふたたび彼は体重が軽くなったかのような感じがした。めまいは、ない。

「父さん」と彼は叫んでいた。「お、お父さん」。そう言うのと、その男の胸に飛び込んだ。

このあとには、ひとしきりの混乱状態が続いた。誰もがいっぺんに説明を試みていた。フークラ・ヒーンがその後その時のことだと思いつけたのは、彼が「お父さん」と呼んだ人物が一度か二度、腰をかがめ自分にキスしてくれたこと、彼の手を握った自分の手がどんどん強くなっていったこと、これだけだった。それから、男は何か言い、フークラ・ヒーンを、手を握り締めたままのフークラ・ヒーンを皆から離れたところへ連れていった。しかし、フークラ・ヒーンにはまだ事態が飲み込めず、立ち止まった。

男はクーツウナルーに話しかけた。クーツウナルーがこう言う。「これからこの人が、女の人、白人の女の人に会わせてくれるそうだ」

「その女の人の髪が黄色かどうか訊いてみてくれ」と、フークラ・ヒーンが命令する。

クーツウナルーが通訳すると、男の表情が喜びでパッと明るくなった。彼はふたたび腰をかがめ、何度もキスしてくれた。

コーハイ酋長は、離れたところに無言のまま立っていた。まるでなにごとも起こらなかったかのように、眼前の虚空を見つめている。その姿には気品と尊厳があった。それでも、どんな者にも感じられてしまう寂しさも、そこにはあった。

フークラ・ヒーンは振り返り、酋長のもとに駆け寄った。目に涙があふれてきた。どうしてよいのか分からず、彼はただ逡巡していた。二人の大人を代わる代わる見つめた。

「彼に、いや連中全員に伝えよ。この子どもにはまた会えると」。マクダーモットがクーツウナルーに通訳するよう命じた。「そして、子どもが彼らのことを忘れることはない。俺の焚き火が燃えるところ、この子の焚き火が燃えるところ、彼らはいつでも大歓迎だと。そして、当然のこととして、莫大なお札の品が贈られるはずだと」。

《それ》は起こったのだった。フークラ・ヒーンには、自分がこの背が高く濃い頬ひげの男の手につかまり丘を越えていくのが正しいことだと思えた。なぜなら、これからあの女性、白く柔らかな肌をした女性、何度も何度も思い出していたあの女性に会いにゆこうとしているのだから。髪の色が黄色のあの女性に。

《訳注》

(1) ホワイト・リバー (White River) ドーンソンの南約二〇〇キロの地点でユーコン河に流れ込む、全長約三二〇キロの支流。一八五〇年にロバート・キャンヘルに「発見」され、そのように命名された。水流が運ぶ土砂の多さから水が白く濁っていたため。原住民も同じ特徴から「白」「砂」を意味する言葉で呼んでいたようだ。しかし、のちに通訳の役割を果たすクーツナールの白人との最初の接触、そしてフークラ・ヒーンの身元が判明するときに言及されていることからして、作品内では「インディアンが白人と接触する場所」の含意があるように思われる。ロンドン作品ではさまざま箇所でも何度も言及されるが、印象的なのは、『野性の呼び声』でバックとジョン・ソーントンが会うのがホワイト・リバーの河口(ユーコン河との合流点)近くのキャンプであることだ。バックとソーントンの出会いが、まるで異人種間の邂逅と想像されている可能性すらある。ホワイトは水流の白からきているはずなのだが、ロンドンの世界にあっては、シニフィアンは容易に浮遊・流動し、他の意味を引きつけ、そこに溶解する。言うまでもなく、バックには「インディアン男」の意味がある。

(2) ドリー船 (dory) へさが高く舷側が外広がりの平底の軽舟。

(3) P・C・Cカンパニー (P. C. C. Company) ロンドンが作品のため創作したと思しい会社名。第二短編集『彼の祖父たちの神』に収められている“*The Great Interrogation*”でも言及される。本作のこの場面と同じく、実在の社名では都合が悪いというところだったのでろう(ロンドンには事実の記録にそうとうに厳密な作家である)。類似した実在しないと思しい会社にP・Cカンパニーがある(P・C・Cがいかに安直かが知れる)。これは、第一短編集『狼の息子』の“*The Priestly Prerogative*”と、第四短編集『男たちの誓い』の“*Bâtard*.” “*The Story of Jess' Uck*”で描かれる。ロンドンが固有の地名・組織名を創作するのは、かなり稀なことである。

なお、複数のクロンダイク作品で言及される実在した会社は、*Alaska Commercial Company* (A. C. Company)、“*Hudson Bay Company*,” *North American Trading and Transportation Company* (N. A. T. & T.) である。当時の商業活動・流通・生活に直結していたわけだから、これらの会社名がアラスカ史やカナダ北西部史をあつかう文献にも頻繁に登場するのは当然だ。

【訳者付記】

“*The ‘Fuzziness’ of Hooekla-Heen*”。短編集『氷点下の子どもたち』に収められているわけではないが、モチーフが明らかに「白

人リ・ウォン」と共通しているため、ここに訳出した。四〇〇〇語。掲載誌は『ユースズ・コロンパニオン』で、ロンドンは原稿料七五ドルを受け取っている。月一二五ドルが『雪原の娘』のアドバンスであったことを考えると（一九〇〇年四月から五カ月間継続する契約だったが、十二カ月分以上（一五七五ドルまで）ロンドンは受け取っている）、すでに生活していけるだけの原稿料がもらえる職業作家にロンドンがなっていた、とは言えるだろう。この作品の執筆にロンドンが一週間以上かかったとは思えず、すると、この長さの短編を一カ月に二作書けば生活費が捻出できたからである（このような計算ができてしまうこの作家の特殊性、異常さについては、コメントのしようがないが）。

執筆は、『雪原の娘』（一九〇一年四月一日脱稿）のあと、一九〇一年五月下旬頃と思われる。短編集の作品で最初に執筆された短編『生命の掟』（一九〇〇年四月一八日脱稿）と、短編集の刊行を念頭に本格的にロンドンが連作を書き始める「キーシュ、キーシュの息子」（一九〇一年七月九日脱稿）のあいだの期間である。あいだに一カ月程度の時間があるものの、エッセイ・書評などを除くと短編小説の執筆順としては、「キーシュの息子」の直前ということになる。

最初の原稿の送付先が『ユースズ・コロンパニオン』という若者向けの冒険小説専門誌であったことからみて、この短編を短編集に入れる考えは、最初からロンドンにはなかったのだろう（他の短編は大半、マックルアズにまず送られ不採用となっている——これについてはのちにふれる機会がある）。似た例に「キーシュ、キーシュの息子」のコンパニオン・ピース（続編と言ってよいのだろうか）にあたる「キーシュの物語」がある。「熊狩のキーシュ」が初出時のタイトルであり、父親のキーシュを扱う。一九〇三年末から〇四年初頭に執筆、〇四年一月四日に投稿されている。この場合も、あきらかに短編集とは無関係に書かれている。ロンドンが、著作、作品、作品集、出版というようなマーケットでの振舞い（商品としての作品の換金）のことだけを考慮してわけではなく、物語の勢い、物語をそれ自身の力によって書かされたことがあるという証左だろう。結果的に作品が上出来だったことは、稀であったようだが。

ただし、以下で見えるように、この作品には、真剣な挑戦である短編集『氷点下』に入れないと作家が判断をするだけの根拠があったように思える。作品の質である。

なお、『ユースズ・コロンパニオン』とロンドンの関係について先にふれておくと、やはり、「火を熾す」のファースト・ヴァージョンと『密漁監視隊の物語』が連作として掲載された雑誌であるという事実が記憶に値するだろう。

ロンドンは存命期間中に短編集を十六冊、チャームミアンによる編集死後出版で三冊、つまり計十九冊の短編集を刊行している。以下がその十九タイトルである。

〈短編集タイトル〉(原題)〔出版年/月〕

『狼の息子』(The Son of the Wolf) (1900/4)

〈内容種別〉
クログダイク

『彼の祖父たさの神』(The God of His Fathers and Other Stories) (1901/5)

クログダイク

『氷点下の子供たち』(Children of the Frost) (1902/9)

クログダイク

『男たちの誓い』(The Faith of Men and Other Stories) (1904/4)

クログダイク

『密漁監視隊の物語』(Tales of the Fish Patrol) (1905/9)

海賊冒険もの

『まん丸顔の男』(Moon-Face and Other Stories) (1906/9)

多種 (ユーモア・残虐)

『命への執着』(Love of Life and Other Stories) (1907/9)

クログダイク

『恥かき』(Lost Face) (1910/3)

ユーモアもの

『神が嗤うとき』(When God Laughs and Other Stories) (1911/1)

ユーモアもの

『南海物語』(South Sea Tales) (1911/10)

南海もの

『高慢の家系』(The House of Pride and Other Stories of Hawaii) (1912/3)

南海もの (連作)

『太陽の息子』(A Son of the Sun) (1912/5)

クログダイク (連作)

『スモーク・ベリュー』(Smoke Belieu) (1912/10)

多種 (ミステリーを含む)

『夜に生まれし者』(The Night-Born) (1913/2)

社会主義的

『強者の力』(The Strength of the Strong) (1914/5)

多種・雑

『タスマンの亀たさ』(The Turtles of Tasman) (1916/9)

— 16年11月ジャック・ロンドン死去。以下、チャーミアンによる死後出版 —

『赤い球体』(The Red One) (1918/10)

多種・雑

『王家のパンの味』(On the Makalala Mat) (1919/9)

ハワイもの

『酒の勢い』(Dutch Courage and Other Stories) (1922/9)

多種・雑 (多くの若書きを含む)

『野性の呼び声』(一九〇三)、『海の狼』(一九〇四)、『マーティン・イーデン』(一九〇九)、『月光の谷』(一九一三)といった代表的長編小説の執筆時期と比較すると、ロンドンがどれだけ頻繁にクロンダイクを舞台とした作品を書いていたかが知れよう。また、

『海の狼』執筆のころ、何度も「クロンダイクの作家で終わりたいくない」、「クロンダイクは卒業だ」と手紙に書いていたロンドンが、晩年に及ぶまでこの題材を手放さなかったかも知れる（特定のトポスと結びついた作家は、当時から「ローカル・カラー」の作家とされ、やはり一流とはみなされなかった）。

「フークラ・ヒーンのみまい」が右の十九冊に収められることはなかった。雑誌で作品を発表し（雑誌社に売却し）、そして短編集というかたちで書籍化するやり方によって、経済的な意味で最大限の効率を目指し、それを成し遂げた作家には、かなり珍しいケースになる作品だ。

さて、内容の概観である。

主人公は、おそらく作家の集中力を体現するかのよう、息を止め、一時間も草むらに潜みビーバー狩りをする。今日は、その成功の日である。友人にも祝福される。狩から村へと戻る道すがら、「めまい」をともなうフークラの幻想体験癖や、これから部族が向かうことになる白人が住むドースンのことがふれられる。一族はドースンに行き、「めまい」の謎が解かれる。

最後のくだりまでなかなかの筆の冴えを見せ、「どのような基準で少年向け」と判断したのかと途中までは訝しがる読者もいるだろう。もちろん、作品は、ビーバー狩猟をグラフィックに、読者の五感を最大限まで活用して描く前半と、主人公フークラ・ヒーンの「めまい」の謎が解かれ父親と再会する展開の後半で分裂している。が、「フークラ・ヒーンは背が高くじめじめした草の中ではないかば屈み、なかば跪ひざますいていた」といった一節で始まる物語が、「この二つの音が、まるで競い合うかのように近づいてくる」という緊張感あふれる導入部をもつ物語が、「白人のリ・ウォン」と同じく主人公の意識の分裂を主題とし、主人公の意識と無意識・現在と過去の分裂を示しているのかもしれないと感じられるなら、分裂した作品の構成はそれで意味のある分裂と理解されるかもしれない。

さらには、折島正司が『機械の停止』（二〇〇〇年、松柏社。イントロダクションおよび第三章知覚「分離と接触」）が主張するように、感覚の分離と統合の欠如が自然主義一般の主題なのだとするば、この作品の冒頭は、ロンドンが興味深く感じ作品でその方法を実践しているながら、そしておそらくその興味の源泉を自分自身にも説明できなかったろう「歴史的無意識」の表出例として、面白く読めるだろう。作品冒頭でのフークラ・ヒーンの感覚は、嗅覚、触覚、聴覚と見事に分離されている。

が、作品の最大の難点は、後半の主人公の過去を縮約したかたちで語る「説明」的展開が、今日の審美的感性からすると圧倒的に弱いという点だ。フークラ・ヒーンを育てたインディアンたちにはお礼の品が用意され（搾取が主題の『氷点下』の世界ではありえ

ない)、また、それまでまったく言及されていなかった母親の希求さえもが、突如あらわれてしまう(作家が意識していたかどうかは分からないが、後半、“sudden”、“suddenly”という単語が頻出する)。どうも母親との再会にも成功しそうなことから、『アトランティック・マンズリー』誌に掲載された「リ・ウォン」と比較するまでもなく、おめでたすぎるハッピー・エンディング、センチメンタリズム、少年向けのチープトリックと言われても仕方がないだろう。

こうならざるを得なかったから『ユースズ・コンパニオン』が投稿先に選ばれたのか、『コンパニオン』向けのつもりだったから(時間は多少離れるが、執筆上の前二作——“A Northland Miracle” (1900/10/19脱稿)と“Chris Farrington: Able Seaman” (1900/10/22脱稿)——は、この雑誌社に送られ掲載されている)こうなったのかは、永遠の謎ということになるけれど、逆にユーモアまじりの作品も多いにもかかわらず『氷点下』が訴える痛烈な文明批判を、この短編はネガのように裏側から照射してくれている。文明批判の不在が、その存在の意味を光らせてくれている。

もし作家の父親についての不安という伝記的な事実、あるいは世紀転換期の父権的權威の失墜という文化史的事実を考慮するならば、父親探し(そして、取ってつけたようなついでに母親探し)というのは、ある程度納得のいくプロットなのかもしれない。このような、おそらくは安直で正直しきる心情の吐露、心理の投影をあらわす作品が、チャーミアンの手による死後出版の作品集にさえ収録されずじまいになったのは、理解できることのように思われる。チャーミアンは、その伝記(*The Book of Jack London*)でも、ロンドンの出生および二人の父親(実父と養父)のこと、幼年期に抱えたロンドンの家庭内での不安についてはふれなかったのだから。それでも、十九世紀末アメリカの青少年向けの作品という意図をくむならば、旗の違(イギリスとアメリカである)、合衆国の独立記念日の火花が飛ぶ記述(前者とともに青少年の愛国心を鼓舞するものなのであろう)も、当時の大衆向けに流布された言説が政治的に何をしようとしていたかを知るうえで、興味深くはある。

私にとっていちばん興味深いのは、新聞記者か作家と思われるドーズと、通訳をするクーツウナルの存在だ。作中に存在しなくても作品のプロットが成立していただろう人物たちである。しかし、ロンドンはその書かすにはいらなかった。前者では帳面に鉛筆を構える姿勢ばかりが強調され(何がどう書かれどう発表されるのかについて、作品は沈黙する)、大した重要性もないようなのに、クーツウナルが通訳として活躍する場面にむけて、作家は周到な準備をする。とりわけ注目したいのは以下のような箇所である。

「インディアンにしてはちょっと変な子どもがいるな」と、汚れた厚ラシャ製の上着を着た男が言った。彼〔ドーズ〕はときど

き帳面を取りだしてはメモをとっている。

フークラ・ヒーンはすぐ、この男をちらりと見た。が、何を言っているのかは分からない。彼を見ると、例の夢見の病が暴力的に襲ってきた。

騎馬警備隊少尉の制服を着たこの男の相棒は、口から葉巻を抜き取って大声をあげる。「おいおい、あいつはインディアンじゃない……」

このあと、やりすぎと感ぜられる花火が炸裂するシーンがあり、主人公が「花火だ！ 建国記念日！ 八月四日！ ばんざーい！」と叫ぶことになる。

しかし、フークラ・ヒーンの覚醒とドーズの執筆作業が、まるでつながっているかのような書き方がされている。「リ・ウォン」においては、大地の破壊が彼女の覚醒と結びつくかのような書き方があった。女性がしばしば「大地の娘」(“daughters of the soil”)と呼ばれるロンドンの極北世界では、当然なのだろう。では、なぜ少年を主人公とするこの作品では「執筆の場面」なのか。建国記念日なのか。ロンドン自身の文名の確立、時代の男性性の奪回、これとリンクしている国家権力の確立の欲望が現れていると我々は考える。帝国主義の時代にあって、個人の確立と国家の覇権が重ねられてしまうことがあるのは、仕方のないことなのかもしれない。

これは、ロンドンのクロンダイク作品の傑作「老人同盟」(“The League of the Old Men”)と同じ構図である。文字が意味を成す過程への執着であり、通訳により異なった言葉になされる橋渡しである。成功した姉妹篇「リ・ウォン」との共通点・相違点より、こちらのほうが興味深い。

(おおや・たけし 理工学部准教授)